

初級授業における協働学習の試み

—フエ外国語大学1年生の文法授業の場合—

Trial of collaborative learning at beginner class:

A case of grammar class for first year students of University of Foreign Languages, Hue University

チャン ジェム ハー

TRAN Diem Ha

フエ大学外国語大学

University of Foreign Languages, Hue University

In recent years, collaborative learning, which is known for its roles in improving learners' self-learning ability, has been getting more attention. This study investigated the applicability of collaborative learning in the classroom of first-year students. The survey was conducted with 34 first-year students in the academic year 2021-2022 who attended the collaborative learning class and the teacher-centered class. From the analysis, it shows that students' reactions to collaborative learning hours and the ability to apply collaborative learning to first-year students' classes. Besides, it is necessary to note some points to improve the quality of the collaborative learning class. This study is a useful reference for further studies.

キーワード：協働学習、初級、文法授業、自律学習

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年、ベトナムの日本語教育において学習者の主体性やコミュニケーション能力育成を重視したグローバル人材育成が注目されている。なかでも、「自律学習力」を高める協働学習に関する研究が盛んに行われるようになった。

フエ大学外国語大学では2020年から2021まで協働学習実践研究会による教師研修が実施され、参加教師たちはこの研修から学んだ協働学習を自分たちの実践現場にも応用できるかどうかさまざまな授業に試みてきた。

1.2 研究の目的

本研究では、初級クラスの授業を事例としてとりあげ、この授業で導入した協働学習の授業活動の中で学習者はどのように活動参加をしていたのかを探った。ここから、今後の初級授業への導入の可能性について考察した。

2. 研究方法

2.1 試みの概要

初級授業は総合日本語授業の1年生を対象とした五つの必修科目である。簡単な会話表現、語彙・文法などの習得を目的としている。具体的には、総合日本語1が聴解、総合日本語2が会話、総合日本語3が読解、総合日本語4が文法、総合日本語5が漢字の授業である。総合日本語4クラスでは「みんなの日本語」を使用して初級レベルの文法を教えている。授業は全15週間で、1週間に2コマ（1コマ50分）

を、2021年9月から12月までに行った。ただし、新型コロナウイルスの影響のため、全てオンラインで行った。

これまでは教師中心の授業であったので、「導入→意味説明→基本練習→応用練習」という流れの授業展開だった。15週間のうち、2週間の授業を対象として次のような流れで協働学習の試みを導入した。授業の前に、教師が学習する文法についてヒントを出したのについて、学習者が自分で文法を調べてくる。授業では4人のグループで予習したことについて共有し、分からないところを相談した後、まだ疑問が残っている部分については教師に質問する。クラス全体でまとめをした後で、教師は「練習B」を個別に点検する。授業後、学生は文法をまとめたファイルをグループドライブでシェアし、仲間のためにクイズをつくる。

2.2 実践の概要分析対象と方法

文法授業に関する調査は受講した1年生の1つのクラス34名を対象として調査した。本調査では、本学の学部1年生の文法授業に導入した協働学習について、学習者の活動参加の実態を探り、今後の導入の可能性を考察する。学習者は、教師主導と協働学習の両方の授業を受けた後、この2つの授業についてそれぞれオンライン調査に回答した。本研究では、この調査結果の中から「利点」、「問題点」、「学習者の積極性」、「自由コメント」を対象に分析する。

3. 調査結果

この調査結果からは、次のようなことが明確になった。

両方の授業で学習者の積極性については差がほとんどなく、協働学習の授業を希望する学習者の割合が高かった。このことから初級授業への協働学習の可能性が考えられた。学習者のコメントからは、協働学習の授業で学習者が自分で調べ、より理解し、達成感も得られると感じていることが分かった。モニター能力も自律学習の能力も高めることができると考えられる。また、チームワークもでき、学習者同士の人間関係を築くこともできていた。ただし、大学入学時から学習仲間に対面で会ったことがない状態でのオンライン授業であったので、これを対面授業でも導入すれば、より効果が明確になると思われた。

一方、学習者からの評価を見ると、教員の役割については反省点がいくつかある。まず、協働学習についての意義や活動手順や注意点について、より適切な説明が必要だったこと、協働学習後に自分自身の学習を振り返る活動（内省）の設定が必要だったことである。また、グループ活動に不慣れな学習者のために、1年生の授業からていねいな指導が必要だと思われた。

4. 結論

今回の試みにより、初級クラスの学習者には、協働学習の授業を希望する者が多く、今後、協働学習を授業に導入することの可能性に期待できる。ただし、今回の調査で明らかになった課題部分については、今後十分に検討した上で、具体的な改善策を検討していく必要があると考える。たとえば、中級上級レベルの学習者に、初級クラスの授業に入ってもらい、レベル差を生かした活動課題の工夫も考えられる。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP21K00624（代表：池田玲子）の助成を受けたものである。

参考文献

池田玲子・笹岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門 創造的な学習のデザインのために』, ひつじ書房
横溝 紳一郎・山田 智久（2019）『日本語教師のためのアクティブラーニング』, くろしお出版